第 35 回　2015 年 3 月 25 日（水）
ゲスト　恩田雅和（和歌山放送　元プロデューサー　現「天満天神繁昌亭」支配人）
テーマ　卒業論文は「落語考」　放送局では長寿番組「紀の国寄席」を企画
　　定年直前に「繁昌亭」支配人へ

主な内容
◎桂米朝さんとの出会い
◎大学 2 年進級のとき休学
◎療養中に聞いた落語番組がきっかけ　定席「新宿末広亭」に通い出す
◎卒業論文は民俗学的な視点で「落語考」
◎自分で語るより　落語の面白さにひかれていった
◎最初の仕事は放送記者と高校野球の中継担当
◎高校野球地方大会の全試合中継は　全国でただ一局　和歌山放送だけ
◎和歌山は戦前から「野球王国」
◎若手落語家の勉強会「紀の芽寄席」を主催　18 年　90 回公演
◎長寿番組「紀の国寄席」はひょんなことから誕生
◎入社早々、高校野球の中継現場でプロの落語家と出会う
◎放送局のプロデューサーから「繁昌亭」の支配人へ
◎寄席は“夢の空間”　落語とは現実と夢を行き来する仕組み

司会　桂米朝さん（2015 年 3 月 19 日死去）の告別式の日の今日、奇しくも、繁昌亭の支配人恩田雅和さんをお迎えすることになりました。米朝さんとはどういうご縁がおありなんですか。

＜桂米朝さんとの出会い＞

恩田氏　和歌山放送の 20 周年のとき、米朝師匠に「一日放送局長」として、丸一日、生放送に出演していただいたことがあります。和歌山放送は 1959（昭和 34）年開局なので、昭和 54 年のことでした。実は、私が落語に関するエッセイ集『落語ジャーナリズム』(有馬書店、1990 年)を出版した際、米朝師匠に序文（「恩田さんと私」）を書いてもらって、それを帯にしました。

手前みそで面映ゆいんですが、「恩田さんには、芸を見る視点というものが、既に確固と定まっていると思います。この機会に、この方の文を改めて読み直してみたいと思っています」というような身に余る序文をいただいています。

その後、人間国宝（1996 年）になられ、数年前には文化勲章を受章（2009 年）された米朝師匠からいただいた原稿は、私にとって大きな思い出であり、私の宝になっております。

司会　改めてご紹介申し上げます。元和歌山放送プロデューサーの恩田雅和さんです。

関西民放クラブの理事で、「漱石を読む会」の先生と、「天満天神繁昌亭」の支配人をしておられます。

恩田さんは、1949（昭和 24）年、新潟県のお生まれで、慶応大学を卒業後、1974(昭和 49)年和歌山放送に入社。本日は和歌山放送時代の主な二つのお仕事についてお伺いします。

落語番組を企画し、担当、もう一つは高校野球の中継に、入社以来ずっとかかわってこられたということで、まさに硬軟取り混ぜてという感じがいたします。

“落語と野球”は、恩田さんにとって、仕事の大きな両輪であったということです。まずは落語の話から。「恩田雅和　落語人生」を学生時代、和歌山放送時代、繁昌亭時代と三つに分けて、最初に学生時代。今日まで落語にかかわるお仕事をしておられますが、その多くのルーツは学生時代にあったということですか。

恩田氏　新潟高校を卒業して、昭和 43 年に上京しました。東京で 1 年間、予備校生活を送った翌 44 年に慶応大学文学部に入学。慶応の文学部は、1 年間だけ三田ではなく、横浜の日吉キャンパスで過ごしました。下宿が吉祥寺だったので、渋谷に出て映画をよく見ました。大学 1 年のときは映画青年でした。特にクロード・ルルーシュ監督の映画にひかれて、必ず見に行っていました。そんなことをしていて、2 年生で、新潟に帰省したとき、毎日熱が出て、咳が出る、風邪だと思っていたのが、

風邪じゃなく、結核だったんです。折角、1 年浪人生活を送って入ったばかりなのに、もうがっくりきまして。医者の話では、結核は 3 年、療養生活を送らないといけないという。

＜大学 2 年進級のとき休学＞

それから新潟の病院で闘病生活が始まります。3 年と言われていたが、主治医の言い付けをきっちり守って、つまり薬とストマイの注射を週 2 回受けて、言われた通り療養生活を送っているうちに、徐々に回復して、1 年で闘病生活を終えたんです。3 年というのを覚悟して、とにかく病院での日々をどう過ごすか考えました。ベッドに縛られた生活だったので、療養生活を慰めるものとしては、ラジオしか身近になかったんですね。毎日、昼も夜も、とにかくベッドに横になりながら、聞いていました。いろんな番組、もちろん音楽が好きで、NHKFM の音楽も楽しんでいましたが、特に落語番組にひかれるようになりました。

落語がこんなに面白いものだと、そのとき気が付いたんです。あえて言うなら、たまたま NHK で林家三平の「犬の目」という、ばかばかしい話を聞いていたとき、私がベッドで大爆笑したので、丁度、周りにいた患者や見舞いに来ていた祖母なんかが、びっくりしたなんてこともありました。

それをきっかけに、落語番組を毎週楽しみに聞くようになり、NHK の週 2，3 回あった演芸番組を全部毎週、聞いておりました。

＜療養中に聞いた落語番組がきっかけ　定席「新宿末広亭」に通い出す＞

ラジオで落語を聞いているうちに、自分は文学部に入学したんだということも自覚し始め、これはひょっとして落語には、文学性があるんじゃないかということに思い至り、2 年復学後は、“落語における文学性”という大きなテーマを追究していくことになるのです。

復学後は、今度は三田キャンパスなので、今の JR 山手線・田町駅が最寄りの駅になり、田町から吉祥寺までの間にある新宿の「末広亭」という定席に授業のあいま通うようになりました。

東京の寄席は、今もそうですが、10 日間の日替わり興行なんです。

繁昌亭は今 1 週間の週替わりですが、東京の「末広亭」は今も 10 日間の日替わり興行です。1 日から 10 日（上席（かみせき））、11 日から 20 日（中席（なかせき））、21 日から 30 日あるいは 31 日（下席（しもせき））と、そういう興行形態が今も続いています。

新宿「末広亭」へは、上、中、下と興行が替わるたびに必ず行っていましたので、毎月 3 回、丸 2 年通ったことになります。それだけでなく、寄席に通っているうちに、立川談志にひかれ、彼を追っかけて聞きに行くようになりました。当時は月 1 回、「談志ひとり会」というのを紀伊国屋ホール、あるいはもうなくなった上

野の「本牧亭」でやっていて、そのどちらかに足しげく通っていました。
そうこうしているうちに、4 年生になり、卒業論文を書かないといけない。それで私は、落語で書こうと決めていました。落語をテーマにした研究論文の場合、例えば三遊亭圓朝という日本の近代文学の創始者であるともいわれている人について書いた方が、東京大学にいたんです。
「三遊亭圓朝論」を著した越智治雄助教授(当時)です。私は特に圓朝にひかれたわけではないんですが、落語に詳しいということで越智先生に近づきました。越智先生は漱石研究者であり、大学時代の友人藤井淑禎に誘われて一緒に「漱石研究ゼミ」に通うことになりました。彼は、越智先生の指導を受け、　卒論を漱石で書いたんですが、その卒論が評論家の江藤淳から絶賛され、学会でも注目されました。これまでの漱石の研究の一部がぐらぐら揺らぐほどの内容だったということです。彼はこの 3 月、立教大学教授を定年退職しました。
私は、友人の藤井に付いてその越智先生の「漱石研究ゼミ」に通っていたんですが、私の関心は漱石ではなく、落語だから、ゼミは休みがちで、新宿の「末広亭」のほうに通うことが多かったですね。

＜卒業論文は民俗学的な視点で「落語考」＞

私は、越智治雄先生から卒論指導を受けていたんですが、慶応では、国文学の主任教授として、有名な池田弥三郎先生がいて、この先生は、民俗学者・折口信夫の高弟なんです。折口信夫の優秀な教え子だったんです。折口信夫は國學院大學の出身で、國學院大學の教授でもある。だから、当時の慶応の国文はいわゆる池田弥三郎の民俗学が主流だったわけです。従って、私も池田先生の影響で、いわゆる民俗学的な落語論を書きました。繁昌亭の運営に携わったとき、この卒業論文が、いろんな意味で生きているんじゃないかという気がしています。
それで大学を卒業するとき、たまたま和歌山放送の求人に応募して、一次試験には 200～300 人ぐらいの受験者がいましたが、縁もゆかりもなかった関西、しかも和歌山という地に就職が決まりました。それもラジオ単営局だということ、ふるさと新潟で闘病中の 1 年間、ラジオにずっと親しんだということもあり、これが私にとって大きな原点だった。だから、就職してからずっと、放送局で仕事をしている間は常に「このラジオを、闘病中の人が絶対聞いているんだ。そういう人たちに届くような番組作りをしていこう」と、ずっと心の隅に思っておりました。

――― ところで落語にひかれたという一番の理由は何だったんですか。

恩田氏　落語の文学性に非常にひかれましたね。その奥深さに、日本文化そのものがあるということですよね。それで、これは学問の対象になるだろうということも落語

にひかれた大きな要因です。

――― ただ、落語の面白さとか、一人の話者がさまざまなことを演じるとか、人を笑わせるというそのことだけではなかったんでしょうね。

恩田氏　そうですね。ちょっと難しいことを言いますと、落語のネタ一つとっても、日本の芸、例えば歌舞伎でも浄瑠璃でもいいんですが、その影響を必ず受けているんですよ。例えば「仮名手本忠臣蔵」という歌舞伎の大きな題材があるんですが、それをちゃかす意味で「七段目」とか、いろんなネタが出てきたわけです。人情噺の「中村仲蔵」でも、あるいは「淀五郎」でもいいんですが、こういうネタが「仮名手本忠臣蔵」を題材に、落語の演目として出来あがってきた。それは歌舞伎の、ある程度芸能の継承でもあるけれど、歌舞伎への批判的、あるいはちゃかす要素も持ちながら次の芸能の落語に花開いていった。そういう日本文化の大きな歴史の流れがあるんですね。たまたま歌舞伎の話をしましたが、歌舞伎だけでなく、例えば能や狂言の影響をもの凄く受けてきた。これは日本文化の大きな特徴なんですが、前の芸能を引き継ぎながら、ちゃかしたり、批判したり、もどいたりしながら、次の芸能が発達していくのです。
だから最初、卒業論文は具体的に、例えば圓朝とか、三遊亭圓生とか、柳家小さん(落語界初の人間国宝)といった特定の噺家に何度も間近に触れましたが、そういう噺家論ではなく、演目、ネタの追究というか、そういったテーマについて研究していきました。

――― 卒業される頃には、かなりのネタを頭の中に入れていたんでしょうね。

恩田氏　そうですね。具体的には分かりませんが、それはもう、200 でも、300 でも入っていると思いますが。

――― もちろん、いろんな資料を集められたと。一方、ご自分で落語をしゃべろうという気はなかったんですか。

＜自分で語るより　落語の面白さにひかれていった＞

恩田氏　それは全くなかったんです。例えば繁昌亭で仕事を始めたとき、当時の桂三枝会長に聞かれました。「自分で(落語を)やる気がなかったのか」と。私は「そんな気がありませんでした」と。
今の文枝はびっくりしまして、彼は関西大学の学生時代、あの“落語大学”を作った人なんです。彼は先代の文枝のところに行きましたが、一番影響を受けたの

は、米朝さんなんです。学生時代に米朝さんの落語を聞いて、自分は落語の世界に行こうと思ったぐらいですから。

（文枝会長は）米朝の影響を受けているんですが、学生時代にいろんな落語家を見たときに、自分ならこうする、そう思ったと言うんです。そこが私との大きな違いですね。

こんなことは自分ではとても出来ない。出来ないけれど、なぜこれほど面白いんだろう。なぜこれだけ自分の心をひきつけるんだろう。なぜ、なぜだと、その疑問を解くことに一生懸命集中したんですが、当時の三枝さんは、自分ならもっと面白いネタを作ると創作落語のほうへどんどん行ったんですね。あれは自分ならもっと面白い高座が出来るからということで、そこが大きな違いですね。天才的な人との違いですね。

――― さて、ラジオ単営局・和歌山放送に入られた。でもその頃は落語の番組とか、落語を生業（なりわい）にしようというおつもりはなかったんでしょう。

＜最初の仕事は放送記者と高校野球の中継担当＞

恩田氏　当時、和歌山放送は「上方落語を楽しむ会」という公開録音風の番組をやっていましたが、入社して間もない私などは、とても番組を担当することも出来なくて。初め、報道部に配属され、放送記者の仕事をしていました。事件、事故の取材ばかりで、制作番組とは全く無縁だったんです。

ところで、和歌山は「野球王国」で、とにかく野球中継をやると、盛り上がるんですよ。プロ野球だけじゃなくて、高校野球も本当に全県民こぞって関心を持つ大きなイベントであることが分かりました。私も野球が好きで、中学まではやっていたということもあって、野球番組を自然と手伝うようになりました。

1974（昭和 49）年 4 月に入社して、その年の 7 月の全国高校野球選手権和歌山大会の手伝いに県営紀三井寺球場に通い出しました。それから 10 年後には、私がこの野球中継のチーフ的な存在になるんですが、退社するまで毎年、紀三井寺球場の中継に携わったということになります。

――― 和歌山放送は、高校野球和歌山大会の 1 回戦から決勝まで中継しているんですか。

＜高校野球地方大会の全試合中継は　全国でただ一局　和歌山放送だけ＞

恩田氏　和歌山放送が開局したのは、1959(昭和 34)年なんですが、夏の高校野球の中継を始めたのがその翌年 1960 年から。それが好評だったため、次の年から高校野球の予選和歌山大会を全試合生中継するようになりました。今年（2015 年）で 54 年目を迎えます。10 年ほど前に全国のラジオ局（民放）に問い合わせたことがあるん

ですが、地方大会を 1 回戦から決勝戦まで生中継しているところは一つもありませんでした。和歌山放送は、現在も全試合を中継している全国唯一のラジオ局なんです。　ただし、９年前に紀三井寺球場にナイター設備が出来て、１日３試合だったのが、４試合でも消化出来るようになったため、試合が延びたときなど、４試合目の一部の放送が打ち切りになる場合が出てきました。これはプロ野球のナイター放送を優先する編成になっているためで、年に１～２試合、その影響を受けるケースが出てくるのです。
和歌山大会には毎年 40 校ほどが参加しますが、後輩によると、今も全試合生中継は続いているということです。

――― それにしても、たいしたものだと思います。1 日 3 試合中継するとなると、ディレクター、アナウンサーと毎日、交代で中継放送をやらないといけませんね。

恩田氏　和歌山放送は小さな放送局ですから、高校野球の中継が出来るアナウンサーが二人しかいなかったんです。育てなきゃいけないんですが、新人を採っても、野球が不得手だからスポーツの実況はしたくないとか、そういうようなことが続いたりしましたので、毎日放送からアナウンサーを借りて、和歌山放送が 2 試合担当し、3 試合目を毎日放送に担当してもらいました。

――― 社内でも多分、野球中継のディレクターがいて、全社総がかりで取り組まれた感じですね。

恩田氏　メーンのプロデューサー、ディレクターが私で、連日、十何日間球場に詰めます。3 試合のアナウンサーと解説者の組み合わせなどローテーションも全部決めて、スコアラーはアルバイトで二人ほど雇う。それから技術的なことは局の技術セクションのスタッフが担当することになります。そう大人数でなくて、全試合中継は出来ました。

――― これだけ毎日、1 回戦から放送していますと、和歌山県民にしてみれば、野球が好きでも、嫌いでも、結構一日中、野球放送が流れてくるわけで、リスナーとの距離が近くなりますね。具体的なリアクションはありましたか。

恩田氏　中継放送が始まる前に、スポンサーが付いて、高校野球関連番組を制作し放送しています。「出場校の横顔」という 40 校の出場選手の横顔を紹介する番組です。私と中継を担当するアナウンサー2, 3 人で 40 校を手分けして回り、それぞれプロフィールを取材するんです。この事前取材の時点で、今年はどこの高校が強いか

大体分かりますね。資料が集まった段階で、今大会の見どころといった番組(座談会)を制作して大会を展望します。
そういう取材、放送を繰り返していると、親しい監督、選手ともさらに親密になっていきます。例えば阪神タイガースに行った藪恵壹投手、彼は新宮高校なんです。３年のとき、ベスト８まで行きましたね。大学は一浪して東京経済大へ。それから社会人野球で活躍、認められて、阪神がドラフト１位で指名しました。ドラフト１位で指名されたとき、私は三重県の実家まで取材に行きました。それも当時、新宮高校の監督だった倉本忠博さんが新宮駅に迎えに来てくれて、彼の家まで車で送ってくれました。
それから、プロ野球・侍ジャパンの監督小久保裕紀(元福岡ダイエー)は和歌山県立星林高校出身で、１年に入学したときから、当時の谷口健次監督の目に留まり、「今年、凄い選手が入ってきた」「誰か」と聞いたら、「小久保や」ということでした。ひょろっとした男で、とてもそんな凄いようには見えないが、これは、磨けば大変な選手になると言っていました。その印象が強かったんですが、彼はピッチャーで、星林高校には３年のエースがいたんです。「私が小久保を出したらどうか」と言っても、１回戦は箕島高校と当たったので、やっぱり３年のエースを出すという。ところがエースを出したが、１イニングで３点を取られて、２回から１年生の小久保を出した。小久保が２回以降ピシャッと抑えたものの、３対０で敗れたんです。
その小久保が３年になったら、ピッチャーでもいいんだが、打撃を買われ、４番ショートで出場、結局地方大会ではベスト４まで行ったが、甲子園には無縁で終わった。彼は青山学院大学に行き、福岡ダイエーにドラフト２位で指名された。星林高校の谷口監督にお願いしてインタビュー取材を申し込んだところ、小久保が和歌山放送まで来てくれました。

――― 市立和歌山商業出身で広島カープに行った正田耕三選手は和歌山放送のラジオをよく聞いていたとか。

恩田氏　正田選手も中学の教師をしていた谷口監督の教え子で、彼にもプロに行ってからインタビューする機会がありました。高校時代の思い出を聞くと「和歌山放送はよく聞いていました。とにかく家族がみんな聞くものですから」ということを言ってくれました。あと智弁和歌山が全盛期で、今も甲子園の常連校ですが、監督の高嶋仁さんが、学校関係かご家族でしょうか、ラジオだったら録音しやすいので、智弁和歌山の試合をよくカセットで録音していたようです。それで優勝した瞬間、ラジオで聞いていたら、球場の空気がふぁっと思い浮かぶんだと高嶋監督が語ってくれたのが非常に印象的でした。

＜和歌山は戦前から「野球王国」＞

――― インターネットで、和歌山県の高校からプロ野球のドラフト会議で指名された選手を検索すると、こんな風に 5，6 ページにわたって出てくる。いかに県をあげて高校野球に対して熱心であるかがよく分かる。当時はドラフトで、箕島高校から多くの選手が指名されている。東尾修(西武)、吉井理人（近鉄）など。旧市立和歌山商業からは藤田平(阪神)。

――― 野球王国と言えば、戦前からですね。戦後活躍した西本幸雄さん（1920 年～2011 年）は旧制和歌山中学から立教、そして近鉄へ。

恩田氏　今年 21 世紀枠でセンバツに出場した桐蔭高校の古い名が和歌山中学、そのときの野球部で活躍されたのが西本幸雄さんです。旧制和歌山中学は、戦前に夏の大会で連覇している。

――― 桐蔭は昔、和中だった。和歌山は全部、名前が変わってしまった。大阪は変わらないのに、なぜ和歌山だけ(旧制中学の名前が)高校になって名前が変わったのか問題があるけれど。
桐蔭は和中なんです。和中は、昔の早稲田と一緒でユニホームが真っ白だった。和中―早稲田というコースが多くて、僕が毎日新聞に入って、センバツを担当すると、東京から運動部のベテラン記者が来るんです。定年間近の小川正太郎(早稲田の投手)と井口新次郎（早稲田の 4 番）、これ皆、和中のピッチャーと 4 番バッターなんです。当時プロ野球が全盛でないもんだから、二人とも毎日新聞の東京の運動部にいたんです。多分野球活動、社会人野球の役員とかを兼ねてやっていた人で、日頃何の記事も書かないのだが、センバツの取材に来ると、年 1 回だけ大記事を書くんです。新聞の運動面がまだ 1 ページぐらいのときに、こんな大きな記事を、その二人が書いていましたね。その二人が和中出身なんです。だから、そういう伝統は確かにありました。名記者、名選手が出てきた時代でもありました。

恩田氏　和中に対抗するのに、今の向陽高校ですが、海草中学というのがあって、その海草中学も全国制覇したりしました。

――― 和商も強かったですね。

恩田氏　県立和歌山商業の前身ですね。学徒出陣して戦死した嶋清一（1920 年～1945 年）

が海草中学のときに、2 試合連続でノーヒットノーランという記録を立て（準決勝、決勝）優勝するんです(全 5 試合完封試合)。
今も桐蔭(旧制和中)と向陽（旧制海草中）というのはライバルですが、戦前から対抗していたわけです。

――― さて、和歌山放送における落語とのかかわりはどんな風になっていくんですか。

＜若手落語家の勉強会「紀の芽寄席」を主催　18 年　90 回公演＞

恩田氏　お手許にある資料・朝日新聞「大入り地域寄席」（1993 年 9 月 1 日付）の記事に紹介されている「紀の芽寄席」は、若手落語家の修業の場として、1987(昭和 62)年 10 月に私が運営を始め、2005 年 10 月に終わりますが、実は「終わります」とは言ってなくて、今は開店休業中のような状態です。私が繁昌亭の支配人に就いたので、もう和歌山で引き継ぐものがいないんです。
「紀の芽寄席」は 18 年間で 90 回公演しました。これは桂さん福という桂福団治師匠の三番目の弟子が、ふるさとで落語会をやりたいということでスタートしたんです。
さん福は、それこそ向陽高校の出身で無名時代に私のところへよく遊びにきていたんです。何か番組を持ちたいという意図があったのか、和歌山放送に用もないのに出入りして、そのうちチャンスがめぐってきて、土曜日午後の番組のパーソナリティーとして、番組とかかわることになりました。
「紀の芽寄席」は私が主催者という名目でスタートするんですが、第 1 回はさん福の師匠桂福団治さんに来てもらい、和歌山市役所近くにある喫茶店の３階の和室で開きました。この日は大勢お客さんが来て、80 人ぐらいでしたか。2 回目以降は常時 30 人ぐらい来ていましたね。
そういう小さな地域寄席をさん福が中心になってやっていました。記念の会になると、知名度の高い師匠に来てもらいました。今思い出すと 10 回目は桂春蝶さん、20 回目は林家染丸さん、30 回目は春団治師匠にお越しいただきました。
ところが、そのさん福が 1991 年 9 月 23 日、「紀の芽寄席」を始めて 4 年目に急死するんです。それも和歌山放送の生放送中に倒れて、救急車で運ばれそのまま、亡くなったんです。
私は丁度、別番組の取材で出ていて、会社に帰ってきたら大変だということで、病院に駆け付け、手術直前の彼に声をかけたが、回復することなく亡くなった。そんなことがありました。

＜長寿番組「紀の国寄席」はひょんなことから誕生＞

さん福が亡くなったのは 1991 年 9 月ですが、その年の 11 月から「紀の国寄席」

という番組を始めることが出来ました。これには仕掛けがあって、さん福の弟弟子に桂福車というのがいるんですが、その福車が、さん福のあと、穴埋めという形で応援に来てくれていたんです。
福車といろいろ話をしているうちに、「桂春雨が結婚したんだ」と。「ああそうか」「この相手が、逆玉の輿なんだ」と。カルビ―社長の娘と結婚したというのです。それでうらやましいような話をするんです。私はそのとき、ぴんときました。春雨にお願いして、番組を作ってもらえないだろうかと言ったんです。彼を起用するから、カルビーにスポンサーになってもらえないかと。すぐ企画書を書いてくださいということになって、私は企画書を書きました。
タイトルは「紀の国寄席」、出演・桂春雨、桂福車。落語を一席やる。放送時間は日曜正午から 30 分の番組とする。その企画書を和歌山放送の東京支社に送りました。そしてカルビー本社に行ったら、「やりましょう」ということになりました。こうして、「紀の国寄席」はひょんなことから、突然出来たわけです。さん福が亡くなって 2 か月後、1991 年 11 月にスタート。

――― 春雨さんから、ちゃんと話がいっていたんですね。

恩田氏　春雨を通して、春雨がすぐに社長に言って、当時カルビーはテレビ媒体しかコマーシャルを出していなかった。日本テレビの「笑点」がずっとカルビーの提供でした。小さなラジオ局は相手にしないんですね。ただラジオ局は和歌山放送、それから社長の出身地広島の中国放送だけ出稿(広告を出す)しているということでした。
和歌山放送としては、割と制作費も多いほうで、二人の落語家を使って毎週、落語だけ題材にした番組を作りました。「紀の国寄席」は 1991 年 11 月に始まり、2004 年まで続きました。13 年続いた長寿番組になりました。
番組では、春雨と福車にスタジオで、DJ をやってもらい、中身の落語だけは私が、この「紀の芽寄席」で収録し、それをメーンにして構成。ただ、「紀の芽寄席」もそんなに頻繁に開催出来ないので、近畿で一番の老舗の地域寄席「田辺寄席(大阪)に行ってお願いして、マイクを立たせてもらって収録し放送するという形にしていました。それも、著作権というのは、非常にうるさくて、出演者が OK と言っているからということで録音させてもらっていました。ですから松竹芸能とフリー、この二つのところの噺家を中心に放送していました。

【注】1994 年 4 月 5 日付「朝日新聞」に「残念！消えゆくラジオ落語」の記事の中にこんな記述がある。
「NHK の上方演芸会は今も続いているが、他の話芸も一緒に流す。落語

だけとなると、和歌山放送が毎週日曜正午から 30 分間流す「紀の国寄席」ぐらいになった。(中略)皮肉なことに、地域寄席や落語の勉強会、ホールでの落語会はこのところ、増えてきており、客の入りも上々だ。番組が消えていくのは惜しくてならない気がする」。

――― 「紀の芽寄席」を立ち上げ、それから「紀の国寄席」がラジオで放送出来るようになって、というときには結構充実していたんでしょうね。

恩田氏　やっと、私の好きな番組が出来るということで、収録のときには本当に楽しかったですね。

――― ずっと学生時代、東京の落語を聞いていらっしゃった。それから「紀の芽寄席」「紀の国寄席」では上方落語と接することになる。このあたりの学術的な面白さを感じられたのか、それとも単純に面白いなと感じられたのか。

恩田氏　上方落語を改めてじっくり聞くと、とにかく東京のネタはすべて、こちら、上方がルーツだなと比較するとよく分かります。実際そうなんです。分かりやすい例で言うと、「時そば」というネタは、「時うどん」が東京に流れて行って、東京の人は「うどん」より、「そば」を好むから「そば」に変えたんです。
三代目の柳家小さんが「うどん」から「そば」に変えたとよく言われています。
その例を一つとってもそうなんですが、例えば「高津の富」、大ネタで知られていますが、東京では「宿屋の富」。それは高津という地名が東京の人にはなじめないので、地名を消して「宿屋の富」と変えた。東京に流れて行った話は、タイトル一つとってもすぐ分かりますね。あるいは、「鴻池の犬」、これも大ネタの一つに入りますが、鴻池善右衛門の家に飼われていた犬の話ですが、東京では林家正蔵で、「大どこの犬」というタイトルで聞いたことがあるんです。東京では鴻池善右衛門は親しめないんですね。
地名、人名、あるいは食べ物を変えている東京のネタが、いかに上方のいいところを取っているか、一つの例だと思います。

――― 恩田さんご自身は、闘病中にラジオを聞いて救われた、新しいものを発見したというお話でしたが、実際に「紀の国寄席」を和歌山で放送されて、聴取者の皆さんの反応は如何でしたか。

恩田氏　そうですね。「木ノ下歌舞伎」って皆さん聞いたことがありますか。京都造形大学の卒業生の集まりで、歌舞伎をやっているんです。京都だけでなく、全国で「木

ノ下歌舞伎」という名前で上演している。この木ノ下歌舞伎の創始者木ノ下裕一という人は「紀の芽寄席」に小学生の頃からよく通ってきました。
大学院を卒業後、非常に独自の美意識をもって歌舞伎を創っている主宰者です。その彼が繁昌亭にも時々来てくれて、初めは顔を見ても全く分からなかったが、向こうから挨拶しに来て、「ああ君か」ということになった。つまり、小学生時代から「紀の芽寄席」によく来てくれたお客さんの一人が木ノ下君だったのす。

【注】「木ノ下歌舞伎」
木ノ下裕一と杉原邦生による演劇集団。京都を中心に 2006 年から活動。現行の歌舞伎にとらわれず、新たな切り口から歌舞伎の演目を上演する。

――― この後、繁昌亭のお話に移りますが、和歌山放送の定年を前にして、繁昌亭の支配人の話が来たということを伺ったんですが。

＜入社早々、高校野球の中継現場でプロの落語家と出会う＞

恩田氏　1974 年 4 月というのは、和歌山放送開局 15 周年の年であると同時に、テレビ和歌山が開局した年でもあるんです。つまり、和歌山放送にとって一番のライバル局が出来た年に私は、たまたま和歌山放送に入社しました。入社したその年（1974 年 4 月）、雑用係で紀三井寺球場に出向いたところ、和歌山放送の放送席のすぐ下にあるテレビ和歌山の放送席に見たことのある人がいるんです。それが今井音也さんなんです。彼はフリーのアナウンサーなんですが、元朝日放送のアナウンサーで、桂音也という落語家でもあります。
私は大学時代、東京の定席に通っていましたが、唯一「上方落語大全集」というサンテレビ制作の落語番組を、ネットを受けていたテレビ東京で見ていたんです。ノーカットでまるまる上方落語を放送する非常に良い番組でした。司会が桂三枝、アシスタントが書道家の望月美佐でした。
だから私にとって、上方落語の窓口は「上方落語大全集」（1972 年）でした。
その番組の中で、桂音也さんはご自身の「わぁ」という題目の創作落語、非常に印象深いネタをおやりになっていました。
テレビ和歌山の放送席にいる人がその人によく似ているので「あの人はテレビの落語番組で見た桂音也さんじゃないかなあ」と思ったんです。
番組の中で司会をしていた三枝さんも、(桂音也さんのことを)アナウンサーを辞めて噺家になった異色の人です紹介していたので、じゃ間違いないなと思って中継が終わったあと、１階のテレビ和歌山の放送席に行き、実はこういうものですと名刺を出し、今井音也さんに挨拶したら、「そうか、今日一緒に飲みに行こう」と大学出たばかりの若造を連れて、和歌山市駅前の飲み屋に連れて行ってくれまし

た。私にとっては、生の落語家と親しく話したのは初めて。音也さんもテレビ和歌山のアナウンサーとしての仕事はその年だけでしたが、来られるたびに、私に声をかけてくれたりといった思い出あるんです。
初めてお目にかかってから 4 年後、1978 年急に亡くなられました。そのとき、お電話だけでしたが、奥さんに弔意をお伝えしたことがあるんです。

――― さて繁昌亭の話に戻りますが、和歌山放送在職中に支配人の打診があったんですか。58 歳でいらっしゃいましたか。

＜放送局のプロデューサーから「繁昌亭」の支配人へ＞

恩田氏　57 歳でした。繁昌亭が出来る半年ぐらい前に、“造ったら手伝ってくれるか”という打診みたいなものがあったんです。そうなったら私も参加させてもらいますと言っていたんです。それっきり何もなかったので、そのうちに繁昌亭は、2006 年 9 月 15 日に開場してその後、何にも話がないので、もう立ち消えたんだなあと思っていました。
私は一観客の立場で、オープンして 1 週間後ぐらいの 9 月下旬に繁昌亭に行きました。夜席に行ったんですが、いっぱいでした。2 階席に辛くも座れて、ああいい小屋が出来たなあ、和歌山から大阪に出て来たら、必ず立ち寄ろう、大阪に出て来たときの拠点に出来たらいいなと思いながら小屋を眺め回していました。

――― 末広亭を思い出されましたか。

恩田氏　東京の定席によく似た造りだし、本当に良いものが出来たなあと思いました。

――― （実際にお話が来たときには）一度は心づもりされたことでしょう。

恩田氏　正確に言うと、2006 年 10 月、開場した翌月の初めに正式な依頼がありました。
「ええ、あの話はまだ生きていたのか」という感じで、しかもすぐにでも来てほしいんだけどということでした。私は当時、和歌山放送で番組を 7 本ほど持っていて、他の人に引き継ぐ時間が要るので 12 月末まで待ってもらいました。そして 12 月 31 日付で退社しました。
迷いはなく即断しました。定席の運営に携われるという喜びのほうが大きかったですね。

――― 定席の運営について戸惑いはなかったですか。

恩田氏　繁昌亭は60年ぶりに大阪の地に出来た定席ですので、定席の運営というのは誰も経験がないんですね。もちろんベテランの噺家である文枝、染丸、春団治師匠もそうですが、大阪で定席に出演した経験がないんです。皆、地域寄席とか、あるいは吉本の NGK（なんばグランド花月）とか、他は米朝師匠がおやりになったホール落語で出演している。定席の経験は出演者も、運営するほうも誰もいない。だから皆手探りだったんです。
ただ私は、東京で丸2年近く定席に通っていたので、お客としての定席の体験はあるのです。この 2 年間で客の目から見た定席の楽しさ、面白さが身に染みていましたので、いろんなことで生かせたと思っています。噺家サイドからはいろいろ不安もあるでしょうが、私の体験から、これは、こういう方針でやるんだと決める。例えば昼席は毎日10人出演するんですが、10人のラインナップの仕方、この人の芸はどの位置がいいかなど、こうしたほうが客には、すんなり受けいれられるんだというラインナップを自分なりの体験に基づいて組み立てています。もう一つ、昼席だけは色物といって、漫才、奇術など落語以外の芸が2本入ります。色物の使い方も、何番目がいいのか。これは出演者も体験していないことです。口幅ったい言い方ですが、学生時代の私が体験したことなんですから。

――― 簡単に定席といっても、そういった意味では結構大変です。

恩田氏　それが定席にとっては、一番の商品ですからね。

――― ラジオで演出するとか、テレビ番組を作るとか、同じような“芸の組み立て”というか、出演プログラムの構成には苦心されているんですね。

恩田氏　噺家によっては自分の前に必ず色物を入れてくれという人がいるんです。つまり自分の前には落語を入れてくれるなということですね。その気持ちは何となく分かります。中には、色物でもジャグリングとか、太神楽など立ち芸を入れてほしいという人がいるんです。要するに、座り芸じゃなくて、立って芸を披露するもの、体験されたら分かりますが、ジャグリングというのは、目で芸を追っているから音楽が鳴ろうが耳は休んでいます。目ばかりで芸を追っていますから、耳は休んでいる。だから次に、落語が出て来たら集中出来ると思います。

――― 放送局では考えられない、いろいろなご苦労がおありのようですね。
学生時代からずっと落語と付き合っておられる恩田さんは落語について、
「寄席は夢の空間　落語とは現実と夢を行き来する仕組み」とおっしゃっている。

＜寄席は“夢の空間”　落語とは現実と夢を行き来する仕組み＞

恩田氏　これも折口民俗学で折口信夫（1887 年～1953 年）が「かぶき讃」(創元社、1953 年)という名著の中で言っているんです。

「歌舞伎には『花道』があって、それで能狂言には『橋がかり』というのがある」。花道というのは、相撲もそうですが、土俵があって、東と西に分かれて花道があるんです。この花道というのは、どうも現実と夢の世界を結ぶ通り道だという民俗学的な考え方があるんです。

【注】「橋がかり」能舞台の一部で揚幕（あげまく）から舞台に通ずる橋状の道
（新潮現代国語辞典）

それで橋がかりも、能の舞台で舞う空間が、観客は自覚していないが、知らず知らずの間に夢を見ている瞬間だと、夢を見ている空間だという考え方があるんです。

歌舞伎も、あの舞台で演じられているとき、観客にとっては夢の空間であり、夢の舞台であると思う。

すると、落語にはそういう空間はないんだろうかとずっと考えていたんです。私の卒業論文の大きなポイントもそこなんです。落語には、花道や橋がかりがないんだろうかとずっと思っていたんですが、あるとき、新宿末広亭でふっと思いついたんです。それは落語には、本題に入る前の入り口である「枕」があるんです。それで落語は本題があって、その後に必ず東京で言えば、「オチ」、上方で言えば、「サゲ」があるんです。

枕があって、本題があって、下げがある。こういう構造になっている。即ち、落語には、歌舞伎の『花道』能の『橋がかり』に相当する空間はないけれど、入り口と出口の「時間」があると気が付いたんです。それが枕であり、下げである。だから逆に枕がなかったり、下げがなかったりしたら、これは落語とは言えなくて、単なる漫談、おかしな話ということになる。日本の伝統芸能として落語を考えるのなら、やはり、空間ではなかったけれど、時間というこの構造が必要であったんだなと思うんです。そうすると、落語の高座それ自体が夢の空間だと、民俗学でいうところの歌舞伎や能と通じるものがあるのではないか。だから、繁昌亭の毎日の舞台は、夢の空間であり、お客さんは夢をひととき、楽しむために来てくれると。また寄席の構造自体がそういう風になっています。高座の仕組みだけじゃなくて、繁昌亭の入り口に立ったら、もうそこが夢の空間であり、昼席の 3 時間 10 分の時間が終わって、繁昌亭から出ると、また現実へ引き戻されるという、いわゆる入れ子のような状態で、夢と現実を往復するのが、寄席を楽しむことではないかなと思う。

――― そろそろ締めのお話を伺います。一つはラジオ時代を振り返って、恩田さんにと

って、ラジオとはどんなものだったか。それから農協関係の番組を作っておられたと伺いましたが、やりがいのあるラジオ時代でしたか。

恩田氏　農協関係の番組というのは、あのＪＡグループ和歌山というのがスポンサーで、和歌山県内の農家を訪ねて、農業に携わった経緯とか、作物の状況などを聞く、1回、10 分位の番組なんです。1992 年から退職するまで 14 年ぐらい続けて担当していました。週 3～4 日放送していましたが、割と制作費があり、県内全域、いろんな地域を車で回り、農家の人たちに出来るだけしゃべっていただくという手法で取材しました。取材を受けた農家の方、またスポンサーにも好評でした。この番組が「日本農業新聞」（全国ＪＡの組織）の編集者の目に留まって、ラジオで取材した農家の人たちの話をぜひ記事にしてほしいという依頼があったので、写真入りで連載記事を書きました。

――― そうしますと、楽しい、充実したラジオ時代だったのかなと思いますが、学生時代に落語と出会い、そして今、落語がお仕事になりました。ここまでの数十年間を振り返って、ご自分ではどんな思いでいらっしゃいますか。

恩田氏　学生時代、寄席に出入りしてこの世界にかかわりたいと思っていたことが、実現しました。1991 年から落語の番組を企画し、スポンサーを見つけて来たということもありますが、それで十数年、思い通りの落語の番組を作ることが出来たということは、本当に幸せだったと思います。
なおかつ、発展して、これは桂福車も言っていましたが、「自分の目の黒いうちに、大阪に定席が出来るとは思わなかった」と。噺家は一様にそう思っています。
私にも落語との新たな関係が生まれてきたんです。
桂文枝という強力なリーダーシップを持つ人がいなかったら、定席は造れなかったので、文枝会長には感謝しています。

――― 落語は夢の世界とおっしゃいましたが、恩田さんの夢はまだまだ続いていくという感じですね。

恩田氏　いやいや、10 年目というのは、一つの節目になるかもしれません。私の恩師の越智治雄先生（元東大教授、1929 年～1983 年）との深い絆もあって、米朝師匠が彼に宛てた書簡類がいっぱいあるんですよ。それは全部奥さんから預かって、現在、繁昌亭で保管しています。繁昌亭の宝物として、若き日の桂米朝が越智治雄に送った手紙、米朝だけじゃなく、6 代目笑福亭松鶴の自筆の手紙もいくつかありました。これを細かく読むと、面白いんですよ。自分はこのネタは、こう考えている

が、あんたはどう思うとかね。そういう風なことを書いた松鶴師匠の越智治雄宛ての手紙もあって、これらを分析しなきゃいけないと思っています。

――― 本当にさまざまな視点から、非常に深い話をたくさんお伺いしました。私からの質問はここで終わらせていただきます。

――― 大学のゼミの打ち上げで上方落語を立て直しに行きますと言われた。サンテレビの「落語大全集」で上方落語をご覧になっただけで、寄席では聞いていらっしゃらない。越智先生から聞いて、やっぱりこれは立て直さないといけないと思ったんですか。

恩田氏　当時、東京の落語界に、桂小南という人がいたんです。小南さんが上方落語を唯一やっていたんです。例えば「野崎詣り」とか、いろんな上方らしいネタをやっていて、しかもあの人は京都出身で関西弁を使ってやっていました。ところが越智治雄に言わせると、「あんなん上方落語と違う」と。越智治雄は大阪がふるさとの人ですから、違う、違うと言っていました。私にとっては、サンテレビの「落語大全集」とともに、小南さんの落語も上方落語の窓口でしたね。

――― それから、和歌山放送に入られたとき、落語番組がありましたか。

恩田氏　「上方落語を楽しむ会」という番組がありましたが、私が入社した翌年ぐらいに終わっています。

――― 上方と東京の落語の違いは、真打ち制度があるかないかの違いだそうですね。なぜ上方に真打ちがないんですか。

恩田氏　米朝師匠がよく言われる上方と東京の大きな違いは、上方は大道芸から発達したと言いますよね。米沢彦八が約 300 年前に生國魂神社の参拝客相手に神社の境内でやった。それが発達したんだから、今、繁昌亭でもそうですが、見台（けんだい）、膝隠し（ひざかくし）や小拍子（こびょうし）といった小道具を使う。小道具自体、東京にはないということは、東京は座敷芸（屋内芸）、外じゃない屋内での芸が発達したから、ああいう小道具は要らない。東京は今も、小道具はない。見台、膝隠しや小拍子を使うのは、上方だけなんです。

人情噺とか、怪談噺というのが江戸で発達したのは、三遊亭圓朝が出現したのもそうですが、屋内でやったからです。時間をたっぷりとって、あるいは怖い話も、難しい話もなんぼでも出来たわけです。

屋内でやっていたから、それが大きな違いで、あるいは真打ち制度、階級制度というのも、それにかかわっているかもしれませんね。上方は外でやっているから階級なんか要らないわけです。外で演じているんだから、通りすがりのお客さんが楽しめればいいんじゃないかということだったようです。真打ちも二つ目（真打ちの下）も要らない考えだったかもしれませんね。その辺、かかわりがあるかもしれません。

――― 長時間にわたって、興味深いお話をありがとうございました。

以上